

十九世紀半ばのアメリカ
—— メキシコ戦争とゴールドラッシュ ——

飯 塚 英 一

十九世紀半ばのアメリカ ——メキシコ戦争とゴールドラッシュ——

飯塚 英一

はじめに

1775年に始まった独立戦争は、1783年のパリ条約締結で終わり、アメリカ合衆国はイギリスから独立する。その後、南北戦争(1861-65)までの七十数年間は、いわばアメリカの成長期にあたる。この時期に、アメリカはなりふりかまわず、ひたすら領土の拡張に専念する。

1803年のフランス領ルイジアナ購入、1819年のスペイン領フロリダ購入、1830年の先住民移住法の制定、1836年のテキサス州アラモにおける有名な「アラモの戦い」、これらはすべて、アメリカが西へ向かって領土を広げてゆく過程で起こったできごとである。

そのあとに、これら一連の領土拡張政策の総仕上げともいえるべきメキシコ戦争(1846-48)が起こり、アメリカはこの戦争に勝って、新たに広大な領土を獲得する。

また、このときに獲得したカリフォルニアで、思いもかけない世紀の大発見があつて、人々が西部に殺到することになる。1848年の金の発見と、それにつづくゴールドラッシュである。

これら二つは、十九世紀半ばのアメリカで起こった、重要なできごとである。しかも、その十年後には、南北戦争が起こるが、これも結局はメキシコ戦争、ゴールドラッシュがある意味で引き金になっている。あらたに州、準州が増えたことで、それら新領土で奴隷制度を認めるか否かという問題がもちあがったからである。

この小論では、これら十九世紀半ばのアメリカに起こった一連のできごとを論じ、たとえばアラモの戦い、メキシコ戦争はなぜ起こったのか、どのような経過をたどったのか、またゴールドラッシュはいかなる状況下で生じたのかを明らかにしたい。

1. アラモの戦い

メキシコ戦争は、別名「ポークの戦争」と呼ばれるように、第11代大統領ジェイムズ・ポーク(1795–1849、在任 1845–49)の主導によってはじめられた、侵略戦争の色合いが濃い戦争である。

この戦争が起こったとき、のちの大統領リンカーン(1809–65)はイリノイ州選出の連邦議会下院議員であったが、彼はこの戦争に反対して、下院で戦争批判の演説を行っている。

しかし、国民の大半はこの戦争を支持していたから、リンカーンは孤立し、自分の選挙区イリノイ州の人々にまで批判されてしまう。

当時リンカーンが所属していたホイッグ党内の取り決めによって、リンカーンはつぎの選挙には立候補しなかったが、彼のかわりにホイッグ党から出馬した候補が落選すると、その責任はリンカーンにあると、さらに彼への批判の声が高まった。

国をあげて戦争への道を突き進んでいるときに、ほんのわずかでもその戦争を批判するようなことをいうと、非難の集中砲火を浴びるのはどこの国でもかわらないが、とくにアメリカではその傾向がつよいように思える。

ちなみに、リンカーンが大統領になる前に、議員として国政に関わったのはこのときだけである。1846年から48年までのわずか二年間、連邦議会下院議員をつとめたにすぎない。

メキシコ戦争に話をもどす。この戦争は、テキサスの領有権をめぐる、アメリカとメキシコの争いに端を発している。

現在アメリカの領土になっているテキサス、ニューメキシコ、ネヴァダ、カリフォルニアの一带は、もとはメキシコの領土であった。

メキシコは1821年にスペインから独立したが、その時点では、現在の領土以外にテキサスからカリフォルニアに及ぶ広大な土地を所有していた。しかし、それらは少数のアメリカ先住民の他には、ほとんど人の住んでいない土地であった。

やがて、アメリカと国境を接するメキシコ領テキサスには、少しずつアメリカ国籍を持つ人々が入り込むようになるが、メキシコ政府はテキサスを無人に近い状態で放置しておくよりも、むしろ彼らが入植してくれることを歓迎して

いた。

1835年の時点で、綿花栽培を目的にアメリカからテキサスへ入植した人の数は、およそ 35,000 人にのぼり、彼らが連れてきた奴隷も 5,000 人を超えるくらいになっていた¹⁾。

彼らアメリカからの入植者たちはその数が増すにつれて、メキシコ政府に対し、テキサスの自治を要求しはじめる。

しかし、メキシコの最高権力者サンタ・アナ(1794-1876)は彼らの要求を認めなかった。それどころか、彼はメキシコをそれまでの連邦制国家から中央集権国家にかえ、国家体制の強化をはかり、テキサスのアメリカ人を武力で押さえ込もうとする。

これに反発して、テキサスのアメリカ人住民はメキシコからの独立を主張しはじめる。これが有名な「アラモの戦い」に発展する。

1836年2月、一部の住民が武装し、アラモの教会跡地に立てこもり、サンタ・アナの率いるメキシコ軍を迎え撃つ。

戦いは2月23日から3月6日までつづき、最後にはアラモに立てこもった187人全員が戦死するという痛ましい結末をむかえる。亡くなった人たちのなかには、国民的英雄のデイヴィー(デイヴィッド)・クロケット(1786-1836)や、ボウイナイフにその名をのこす、ジェイムズ・ボウイ(1796-1836)らがいた。

サンタ・アナはさらに、テキサス全土の制圧に向かうが、アメリカ軍の計略にかかって捕らえられ、テキサスの独立を認める条約に署名させられてしまう。

その結果、1836年4月に、テキサスは共和国として独立するが、それでこの問題が解決したわけではない。

2. メキシコ戦争

アメリカの意図は、とりあえずテキサスを独立させておいて、時期をみてアメリカの領土に組み入れようというものであった。これはアメリカがよくつかう手で、じっさいにテキサス共和国は、のちに独立国として自らの意志でアメリカ合衆国への加入を果たすことになる。

そして、1845年3月、ポークが大統領に就任すると、彼はその就任演説すでに領土拡張の野望を露わにし、テキサス、ネヴァダ、カリフォルニア、ニュ

ーメキシコ帯と、当時はイギリスと共同で統治していた、「オレゴン・テリトリー」と総称される現在のオレゴン、ワシントン、アイダホの各州にまたがる地域の獲得を訴える。

くすぶりつづけたテキサス領有問題は、1846 年に入って、決定的局面をむかえる。

ポークはまず、連邦加入が決定していたテキサス領のさらなる拡大を認めること、それにカリフォルニアとニューメキシコを 2,500 万ドルで譲渡することという、無理難題としか思えない要求をメキシコ政府につきつける。

当然、メキシコ側はこれを拒否する。その結果、同年 5 月に、アメリカがメキシコに宣戦布告して、メキシコ戦争(米墨戦争)がはじまる。「リメンバー、アラモ(アラモを忘れるな)！」を合い言葉に、国民が団結して、メキシコと戦うことになった。

アメリカがよくつかう「リメンバー、〇〇〇」はこのときからはじまり、その後何度もつかわれることになる。1941 年の日本軍のハワイ真珠湾攻撃のあとに、アメリカでわきおこった「リメンバー、パールハーバー！」の声も、その例であることはあえていうまでもない。

いざ戦争がはじってみると、戦力はアメリカの方が圧倒的にまさっていたから、アメリカが一方的にメキシコ領内に攻め入るという戦い方になり、メキシコは防戦一方であった。

アメリカは陸海双方からメキシコ領内に進攻し、総司令官ウィンフィールド・スコット(1786-1866)の率いるアメリカ軍が、1847 年 9 月に首都メキシコシティを占領して、この戦争は終わる。

翌年 2 月 2 日、メキシコシティ近郊のグアダルペ・イダルゴで、両国の平和条約が結ばれる。

この「グアダルペ・イダルゴ条約」によって、リオグランデ川以北をアメリカ領として承認し、現在のカリフォルニア州、ネヴァダ州、ユタ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州にあたる地域をアメリカに 1,500 万ドルという、破格の安値で譲渡することに、メキシコは同意した。

さらに、この条約には、メキシコ政府が銀行家や商人などアメリカ市民に負っていた 325 万ドルの負債を、アメリカ政府が肩代わりすることも条件として

ふくまれていた。こうして、アメリカはねらい通りに新たな領土の獲得に成功している。

一方、アメリカはメキシコ戦争開戦前後に、イギリスとオレゴン・テリトリーの領有に関する交渉もすすめていたが、英米双方のかけひきの末、1846年6月に、北緯四十九度以南をアメリカ領とすることで合意し、現在のワシントン州、オレゴン州、アイダホ州、それにモンタナとワイオミング両州の一部がアメリカ領になった。

その結果、メキシコ戦争が終結した時点で、アメリカ合衆国の領土はハワイとアラスカをのぞいた、現在のアメリカ本土四十八州になり、約半世紀にわたって押し進められた、アメリカの領土拡張は一応の決着をみた。

アラスカをロシアから購入するのが1867年で、ハワイが合衆国に組み入れられるのは1898年のことである。

3. 世紀の大発見

メキシコ戦争終結とほぼ同時に、アメリカばかりでなく、ヨーロッパやオーストラリア、さらにはアジアにまで衝撃をあたえるできごとが起こる。

カリフォルニアにおける金の発見と、それにつづくいわゆるゴールドラッシュである。

1848年1月24日、現在のサクラメントに近いコロマで金が発見され、世界中からこの金を目当てに男たちが殺到することになる。

ここで注目したいのは、この「1848年1月24日」という日付だが、これはグアダルペ・イダルゴ条約が結ばれ、カリフォルニアが正式にアメリカ領になる、わずか数日前のことである。

これも歴史の皮肉であろうか。もう少し前に金が発見されていたら、カリフォルニアをめぐる歴史はちがった展開をみせていたことだろう。

メキシコがスペインから独立する前は、カリフォルニアはスペイン領だったから、スペインが何らかの形で、介入していた可能性もありえたかもしれない。

幸いにも、金の発見が世界中に知れ渡ったときには、条約も締結され、カリフォルニアは完全にアメリカの領土になっていたから、金が出る土地をめぐる争奪戦は起こらなかった。それにしても、金が出るとは夢にも思っていなかつ

たアメリカにとって、これはまさに「濡れ手で粟」を地で行くような結果となった。

いずれにしろ、この大発見は、アメリカの歴史とアメリカに住む人々の意識までもを変えてしまう事件であった。

「アメリカンドリーム」といえば体裁よく聞こえるが、じっさいは一攫千金の夢を追い求めるという、アメリカ人の国民性に、少なからぬ影響をあたえたのが、このゴールドラッシュである。

この大発見のきっかけをつくったのは、開拓者ジョン・サッター(1803-80)である。サッターはドイツで生まれているが、両親はともにスイス人であった。

彼は若い頃に乾物を商う事業をはじめが、三十代で事業に失敗し、多額の負債を負う。債権者たちから逃れるため、彼は妻子をスイスにのこしたまま、パリへ逃亡する。

逃げる途中、いっしょに旅をしようと親切に誘ってくれたドイツ人の若者たちから、隙をみて金をうばい、姿をくらましたという話ものこっていて、サッターはかなり悪辣なところのある人物である。

その後、さらに借金をして、1834年7月にパリからアメリカへ渡り、ニューヨーク、セントルイス、サンタフェとアメリカ各地を渡り歩くが、最後には食いつめて、1838年12月にハワイへ渡る。

サッターの経歴で驚くのは、どこへ行っても、彼はその土地の有力者と親しくなり、自分を大物としてうまく売り込んでいることである。彼は服装とマナーにはつねに気を配り、自分を洗練されたヨーロッパ紳士として演出していたという。

ハワイでも、ホノルルでもっとも有力な貿易商ウィリアム・フレンチに取り入って、彼の船でアラスカを経由して、カリフォルニアまで送ってもらう。

サッターが、当時はヤーバブエナと呼ばれていたサンフランシスコにたどり着いたのは、1839年7月のことである。

このときはまだ、カリフォルニアはメキシコ領だったが、ここでもサッターはやはり、うまく人に取り入る才能を発揮して、カリフォルニア総督のアルヴァレードに接近している。

カリフォルニアの警備を任すことのできる人物をさがしていたアルヴァレー

ドに、自分はスイスで軍隊を指揮した経験があると言って、うまく売り込んだのである。

サッターがスイスで数年間兵役に服したことは事実であるが、除隊するときの階級は大尉だった。

少しでも自分の力になってくれる人物をもとめていたアルヴァラードは、サッターを信用して、現在のサクラメント近郊、サクラメント川上流の、アメリカ川に合流するあたりの土地 48,000 エーカーを格安で払い下げたのである。

サッターはこの地に砦を築いて周辺地域の開拓にとりかかり、さまざまな苦難の末に、開拓地を少しずつ充実させていった。

もともと、サッターにはこの地に町を建設したいという壮大な計画があったが、それを実行に移そうとしたのが、1840 年代半ばであった。

町の建設には大量の木材が必要になる。そのためには製材所を作らなければならない、とサッターは考えた。この製材所建設のために、中心になって働いたのが、ニュージャージー州生まれの大工、ジェイムズ・マーシャル(1810-85)である。

マーシャルは水力による製材を考え、現在のサクラメントの東に位置するコロマ近郊のアメリカ川沿いに、水車小屋を建設する。

ところが、建設中の 1848 年 1 月 24 日に、マーシャルが川底に光る鉱物を発見したことから、彼ら開拓者とカリフォルニアのその後の運命が大きくかわることになる。

はじめのうち、マーシャルは半信半疑だったが、いろいろと調べてみて、これが金だという結論に達した。すぐに、サッターに報告すると、サッターも百科事典を調べて、いろいろ検査を試みたところ、やはりこれが金であることを確信した。

それからは、砦のなかは大騒ぎになった。サッターは何とかして、この話が外に広まらないようにつとめたが、サンフランシスコに金発見のニュースが広まったのは、あっという間であった。

サッターの箝口令が及ばなかった者たちが有頂天になって触れまわったり、サッター自身も、周囲に口止めた割には口が軽く、親しい人たちにひそかに話したりしたからである。

この話は、カリフォルニア駐屯のアメリカ軍にも伝わり、その報告書を書いたのが、のちに南北戦争でアトランタ攻略を果たし、グラント政権では合衆国陸軍の総司令官をつとめることになる、ウィリアム・シャーマン(1820-91)であった。彼はこのとき、若手将校として、カリフォルニアに駐在していたのである。

ちなみに、シャーマンはのちに、サッターとは親友といえる間柄になり、晩年まで親しく交際した。サッターが 1880 年 6 月に、おそらく卒中だと思われるが、発作を起こして急死したのは、このシャーマンとワシントンのホテルの自室で話しているときだった。

金発見の報告は大統領ポークのもとにも届き、同年 12 月には、大統領が連邦議会でカリフォルニアで金が発見されたことを正式に発表している。

人々がカリフォルニアをめざして殺到したのはこのときからである。それまでは、アメリカ先住民以外のカリフォルニア住民は 1,000 人足らずだったが、ポークの公式発表から一年足らずで、10 万人にせまる勢いであった。

さらに公式発表から三年で、カリフォルニア州(1850 年に州に昇格)におけるアメリカ先住民以外の住民の数は、255,000 人に達していた²⁾。

4. ゴールドラッシュで稼いだ男たち

このゴールドラッシュに関して興味深いことは、カリフォルニアに殺到した男たちのなかに、金の採掘で財をなした者がほとんどいなかったということである。

金を発見して、ある程度の資産を手にしたのは、早い時期に現地に入った者たちで、それもきわめて少数である。金を発見した者のほとんどが、稼いだ金を「あぶく銭」として、短期間にうちに消費してしまったという。

はじめのうちは、おもしろいように金が採れたし、カリフォルニアがメキシコからアメリカに移譲される時期で、行政による管理もなく、何の決まりもなかったから、採れた金はそのまま自分のものにできた。

もちろん、サッターは土地の所有権を主張し、採掘権取得のために金を払うように要求したが、ほとんど無法地帯と化したコロマ周辺では、誰も耳を貸さなかった。

だが、しばらくして、国の内外にある程度うわさが広まってから、カリフォルニアに来た人たちにとっては、簡単には金は採れなくなっていたし、あまりにも多くの人が殺到したので、採掘する場を確保するのもむずかしい、という状況になっていた。

それに、行き帰りの旅や、現地で命を落とす人たちがたいへん多かった。ある統計では、この時代にカリフォルニアにやってきた人たちは、十二人にひとりの割合で亡くなったという³⁾。

旅の途中で亡くなるのは、事故や病気などが原因だったが、現地で亡くなるのは、酒におぼれたり、賭事や採掘権をめぐるトラブルで撃ち殺されるのが、主な原因であった。この時代、カリフォルニアにおける殺人事件の発生率は、全米でもっとも高かった。

カリフォルニアに来て、身を持ち崩す例が多かった一方で、サンフランシスコやサクラメントで、鉱夫たちを相手に商売をはじめて、のちに大金持ちになった人たちは何人もいる。

もっとも早い時期に大金を儲けたのは、サンフランシスコで新聞を発行し、商人でもあった、サミュエル・ブラナン(1819-89)である。

ブラナンはモルモン教徒をひきいてカリフォルニアにやってきて、1847年にサンフランシスコで最初の新聞、『カリフォルニア・スター』(*California Star*)を創刊した人物だが、サッターの砦に普段から出入りしていたので、金が発見されたすぐあとに、その情報を得ていた。

ブラナンは目先の利く男だったらしく、金発見の知らせを聞いても金を採取せずに、その道具となる、シャベル、金盥、長靴、テントなどを買い占めに走った。

そして、それらを、各地から金を目当てにやってきた男たちに、仕入れ値の十倍から二十倍の値段で売ったのである。すべてが飛ぶように売れ、わずか九週間で、ブラナンが手にした金額は36,000ドルだったという。いまの日本円に換算すると、億単位の大金である。

彼はその後も順調に資産を増やし、鉄道や電信会社の株を買って、地元では有名な事業家になる。だが、晩年には事業や株の売買に失敗して落ちぶれ、妻に見捨てられたうえに、株の損失を裁判で取り戻そうとして敗訴し、孤独のう

ちに亡くなっている。

考えようによっては、このブラナンも「あぶく銭」を稼いでは消えていった男たちのひとりにかもしれない。ただ、彼の場合はあぶく銭の額がけた外れだっただけである。

その他で、有名なところでは、鉱夫たちにジーンズのズボンを買って巨額の富を得たリーヴァイ・ストラウス(1829?-1902)がいる。いまでも世界で売れつづけている、リーヴァイス・ジーンズの創業者である。

彼もはじめは、金を目当てにニューヨークからカリフォルニアへやってきたが、作業用にはいているズボンが破れやすいという、鉱夫たちの不満を耳にして、持参してきたテント用のキャンバス地で、ズボンをつくって売ろうと思いつく。

これが当たるとなり、その後は生地をデニムにかえると、やがて中西部のカウボーイたちにも愛用されるようになり、リーヴァイスのジーンズは作業用ズボンの代名詞になる。こうして、ストラウスは世界有数の大企業の創立者になった。

また、大陸横断鉄道建設のときに、セントラル・パシフィック鉄道を立ちあげ、カリフォルニア側から工事を進めた、いわゆる「ビッグ・フォー」と呼ばれる四人の実業家たちも、カリフォルニアに来て金もさがさず、商売で成功した人たちである。

そのうちのひとりで、スタンフォード大学の創立者として知られている、リーランド・スタンフォード(1824-93)は、サクラメントで鉱夫たちを相手に乾物と雑貨を商う店を経営し、財をなした人である。

彼は 1861 年に、カリフォルニア州知事となり、大陸横断鉄道建設の推進者のひとりになった。

ゴールドラッシュにまつわる興味深い話は、他にもたくさんあるが、なかでもおもしろいのは、土佐の漁師で、アメリカに渡って勉強したジョン万次郎こと中浜万次郎(1827-98)が日本へ帰る前に、カリフォルニアに寄って、帰国の費用を稼いだというものである。

彼は 1841 年に土佐沖で遭難し、アメリカの捕鯨船の船長に助けられるが、このとき、彼はまだ十四歳だった。その後、ハワイを経由して、1843 年にホイッ

トフィールド船長とともに、マサチューセッツ州フェアヘイヴンに行き、その地で教育を受ける。学校を卒業したあとは、捕鯨船の乗組員として、世界各地を回っている。おそらく、彼はこの時代に最も広範囲に地球上を移動した日本人であった。

やがて、万次郎もゴールドラッシュのニュースを知り、カリフォルニアで帰国の旅費を稼ぐことを思いつく。世話になった船長に別れを告げ、彼は 1849 年 11 月にニューベッドフォードをたち、南米最南端のケープホーンを経由して、翌年 6 月にサンフランシスコに着いている。しばらくの間、金の採掘を行い、一時は所持金すべてを失うというトラブルに巻き込まれたものの、最終的には七十日間で 600 ドル以上も稼いだという。

彼はぎりぎりのところで間に合ったのだ。もう一年遅く来ていたら、それほど簡単には金を探せなかっただろう。

万次郎の賢いところは、ある程度のお金を手に入れると、すぐにカリフォルニアをあとにして、ハワイへ向かっていることである。

彼はそのお金で、ハワイでボートを買ひ、中国行きの船にそのボートといっしょに乗せてもらひ、琉球沖でおりると、そのまま琉球上陸を果たしている。これが 1851 年 2 月のことで、まだペリーの率いるアメリカ艦隊が浦賀に姿をあらわす以前であった。

こうして、さまざまなドラマを生み出したゴールドラッシュだが、最初の金発見から十年後の、1859 年に、ネヴァダのヴァージニアシティ近郊で、カムストック鉱脈という、主に銀の埋蔵量の豊富な鉱脈が発見されると、人々は急速にそちらに流れていった。

カリフォルニアのゴールドラッシュは、ひとまず幕を閉じるが、サンフランシスコの繁栄はそのままつづく。

ネヴァダには、都会といえるような町がなく、規模の大きな歓楽街もなかった。カムストック鉱脈で稼いだ男たちは、その金をサンフランシスコでつかったからである。

ところで、カリフォルニアでは、いったいどれほどの金が採取されたのか。気になるところである。アメリカ地質研究所の推計では、最初の五年間で、およそ 1,200 万オンス (370 トン) の金が採取され、これは現在の金価格で計算する

と、50 億ドルに相当するという⁴⁾。

いまの日本円に換算すると、約 5,000 億円である。あくまでも単純計算だが、仮に一万人が金を探し当てたとすれば、ひとりにつき 5,000 万円、十万人が金で儲けたとしても、ひとり 500 万円になる。ひと山当てる確立はかなり高かったとみてよい。

ただし、前述したように、持ちつけない大金を手にして、酒や賭博に蕩尽する者が多かった。

5. その後のサッター

カリフォルニア開拓の先駆けとなり、ゴールドラッシュのきっかけをつくったサッターだが、そのあと彼がどうなったのかは、あまり知られていないので、ここでふれておきたい。

ただ、残念なことに、サッターに関しては、信頼できる伝記が出ていない。英語の文献も少なく、あやしげなものが多いが、日本語のものはさらにひどい。古い英語の文献に出ている話を、裏をとらずにそのまま再録しているから、ほとんど信用できないものになっている。

ここでは、一応わかっていることだけを記しておきたい。

サッターも一時は金のおかげで、多少は懐が潤うが、こういうエネルギー旺盛な人物のつねで、彼は負債や土地所有をめぐる他者と争い、しばらくは裁判に明け暮れる。

どういうわけか、彼自身はあまり金の採掘には手を染めず、自分の開拓農場でつかっていたアメリカ先住民やカナカ人(ハワイをはじめとした南洋諸島の先住民)を採掘作業に貸し出し、彼らの日当の大半を自分の懐に入れるという形で金を稼いでいる。

しかし、サッターはたいへん見栄っ張りな男で、彼には収入をはるかに上回る負債がつねにあった。

彼は一応カリフォルニアでは名士であった。したがって、内外から要人が見学をかねて訪ねてくることが多く、ときにはヨーロッパから貴族が訪問することもあった。

そこで、サッターは上流階級の客を迎えても恥ずかしくないようにと、多額

の借金をしてまで、屋敷や庭園をぜいたくに飾り立てた。その結果、複数の人物から多額の金を借りているという状態がつねであった。

サッターは邸宅をふくめ農場全体を、1851年から翌年の二年間で、すくなくとも六回は抵当に入れていたという記録がのこっている⁵⁾。

そして、その負債の支払いや利子の計算方法で、債権者ともめることが多く、ときにそれが訴訟に発展している。

だが、やがて、負債などにはかまっていられないほどの、大きな問題が生じる。すなわち、これまで開拓してきた広大な土地の所有権がサッターにはない、と言われはじめたことであった。

サッターが農場として開拓している土地は、カリフォルニアがメキシコ領だったときに、メキシコ政府の任命した総督から払い下げられたものと、アメリカ先住民と契約を結んで借りているものであった。

アメリカ領となつてからは、メキシコ領時代の払い下げは無効だし、連邦政府はアメリカ先住民が土地に関してはいかなるものであろうとも、契約を結ぶこと自体を認めていなかった。したがって、サッターは違法土地所有者になってしまうのである。

この問題が表面化したのは1850年からで、連邦政府やカリフォルニア州政府から土地の返還要求が正式にあったわけではないが、新聞などがサッターを批判しはじめたのである。

それに対し、サッターは裁判を起こし、自分の土地所有が正当なものであることを主張する。その結果、1855年3月、カリフォルニア州地裁では、サッターの主張が全面的に認められ、勝訴している。

しかし、サッターに反感を抱いていた地元の議員や弁護士たちが、大土地所有者のサッターに嫉妬している人々を扇動して、騒ぎを起こさせる。やがて、その騒ぎに加わる人々の数がふえて、暴動にまで発展する。

この暴動の煽動者たちのねらいは、裁判の勝訴に関する記録や証拠書類の隠滅であったから、まず裁判所を焼き討ちにしている。そのあとで、サッターの砦を襲撃したのである。

サッターは、建物を焼かれた上に、何人かの使用人も殺されるといった、悲惨な目にあうが、それでも落ち込むことなく、今度は州議会に働きかける。カ

リフォルニアの発展に対する、これまでの自分の功績を認めて、何らかの形で功労金を出してくれるよう要求したのである。

1864年4月、カリフォルニア州議会は、カリフォルニア開拓に対するサッターの貢献を認め、五年間という期限付きだが、年金として月に250ドル、年額にして3,000ドルを支払うことを決定した。

しかし、サッターに反感をもつ者たちは、この決定をこころよく思わず、1865年6月7日に、サッターの農場を再び焼き討ちしている。

翌年10月、サッターは妻や孫たちをともなうて、ついにカリフォルニアを去って、東部に移る決心をする。このとき、彼は六十三歳であった。

サッター一家は、ペンシルヴァニア州南東部のリティッツという小さな町に、居をかまえる。この町を選んだ理由は、孫たちの通う学校であった。教育内容の充実した私立の学校がこの町にあったので、彼は引っ越したのである。彼はここに家を建て、亡くなるまで住むことになる。

しかし、その晩年の暮らしは悠々自適にはほど遠かった。晩年のサッターはまだまだ活力旺盛で、連邦議会が開催される時期になると、毎年のようにワシントンに出向いて、国は自分の功績を認めて、何らかの補償をすべきだと訴えている。

サッターの主張は、カリフォルニアの開拓と農業振興、金の発見とその周辺地域の発展などにより、多少なりとも、合衆国が豊かになるのに寄与したのだから、国はそれに報いるべきだというものである。

彼には、シャーマンをはじめとして、支援してくれる議員の友人がたくさんいたが、議会では彼の主張を認めてくれるような決議はなされず、不満をいだいたまま、1880年6月18日にシャーマンとホテルの自室で話しているときに、急死している。

よくあることだが、その人が亡くなってみると、にわかに生前の功績が脚光をあび、それを讃える声があがりはじめる。

サッターの場合も同じで、一部で批判はあったものの、カリフォルニアの開拓という、彼の足跡の大きさを認める声が大きくなり、いくつか彼を記念する碑などが建てられた。

サンフランシスコ市の中心部には、彼の名前を冠したサッター・ストリート

もあって、いまでも彼は忘れ去られた存在ではない。

こうして、多くの人々の悲喜劇を生んだゴールドラッシュにまつわる狂想曲はその幕を閉じる。

注

1. George Herring. *From Colony to Superpower*, Oxford University Press, 2008. 194.
2. Kevin Starr. *California: A History*, Modern Library, 2005. 80.
3. *California: A History*. 84.
4. virtual.yosemite.cc.ca.us/ghayes/goldrush.htm
5. Albert L. Hurtado. *John Sutter: A Life on the North American Frontier*, University of Oklahoma Press, 2006. 292.

その他の参考文献

Stephen E. Ambrose. *Nothing like It in the World: The Men Who Built the Transcontinental Railroad 1863–1869*, Simon & Schuster, 2000.

Walter R. Borneman. *Polk: The Man Who Transformed the Presidency and America*, Random House, 2008.

William C. Davis. *Three Roads to the Alamo*, Harper Perennial, 1999.

Ronald C. White, Jr. *A. Lincoln*, Random House, 2009.

H. W. Brands. *The Age of Gold: The California Gold Rush and the New American Dream*, Anchor Books, 2003.

『世界歴史大系 アメリカ史 1』山川出版、一九九四。

大森 実『ザ・アメリカ 勝者の歴史 2 果てしなき欲望』講談社、一九八六。

宮永 孝『ジョン・マンと呼ばれた男 漂流民中浜万次郎の生涯』集英社、一九九四。

渡辺惣樹『日本開国』草思社、二〇〇九。